

中京大学英米文化・文学会の沿革

中京大学英米文化・文学会は昭和 41 (1966) 年に設立された中京大学文学部英文学科が母体となって結成された。昭和 57 (1982) 年の大学院文学研究科英文学専攻設置に先駆け、文学部英文学科所属の教員が昭和 53 (1978) 年に組織した「中京大学英文学研究会」が、今に繋がる本学会の始まりである。同研究会の初代会長は服部英二氏であり、年数回に亘る談話会を重ねて、昭和 56 (1981) 年 3 月に機関誌『中京英文学』を創刊した。刊行当初の本誌は会員である教員の、また大学院発足後は院生の論文を含む研究論文を掲載していたが、後には学部生の卒業論文を含む学会の彙報としての側面を付与されつつ、現在に到るまで、計 44 号に亘って毎年刊行されてきた。

『中京英文学』第 7 号までは中京大学英文学研究会がその活動と機関誌の刊行を担ってきたが、その間に昭和 57 (1982) 年に大学院文学研究科英文学専攻修士課程が、またその 2 年後の昭和 59 (1984) 年には同専攻博士課程も設置された。昭和 61 (1986) 年は文学部創立 20 周年であり、本誌第 7 号も創立 20 周年記念号として刊行された。中京大学英文学研究会は最終的に計 24 回の談話会を開催し、また斯界の著名な研究者を招いて講演会等を開催する等の研鑽を続けてきたが、第 8 号が刊行された昭和 62 (1987) 年度よりその名称を「中京大学英文学会」と改め、併せて第二代会長 (英文学会としては初代) に田下優氏が就任された。この年より学会の運営に英文学専攻の大学院生及び英文学科の学生が参加することと

なり、また本学教養部英語科教員も新たに会員に加わって、中京大学における英米文学・英語学研究者が集う学会となった。これに併せて、『中京英文学』の表紙デザインも、従来の初代会長服部英二氏の揮毫による題字を載せたシンプルなものから、英文学科教員ろじゃ・めいちん氏の考案による現行のものへと刷新された。昭和63(1988)年より、中京大学英文学会として毎年定期的に総会及び春季・秋季大会を開催し、英文学科及び大学院英文学専攻を中心とした学会として、本格的な学会活動を展開することとなった。また第10号が刊行された平成元年度から第15号が刊行された平成6(1994)年度までは第三代会長として渡辺忠夫氏が、その後第16号が刊行された平成7(1995)年度から第19号が刊行された平成10(1998)年度までは、第四代会長として片山厚氏が、それぞれ本学会の代表を務められた。この間、定例の活動に加えて各種講演会を外務学術団体とも共催してきたが、平成9(1997)年度には本学名古屋キャンパスに新たに建設された0号館センタービルを会場として、日本英文学会中部支部第49回大会を開催した。文学部英文学科及び教養部の教員が一丸となって開催した学術イベントであった。また『中京英文学』第20号の刊行となる平成11(1999)年度より中野圭二氏が第五代会長に就任され、平成12(2000)年度までその任期を務められた。

新しい世紀を迎えた平成13(2001)年度は、文学部英文学科のみならず、中京大学英文学会にとっても大きな転機の年となった。昭和41年以来、35年に亘って存続してきた英文学科に学部改組の波が押し寄せた。新たに第六代会長となった吉川寛氏の下、中京大学英文学会は新学部開設に伴う学会改組の作業に向けて大きく舵を切ることとなった。学部創設以来、国文学科、心理学科、英文学科の三学科を擁してきた中京大学文学部は、既に平成12(2000)年

度に心理学科を心理学部として独立させていたが、これに続いて平成 14 (2002) 年度より、英文学科も新たに国際英語学部として改組独立することとなった。国際英語学という新時代の学問的ディシプリンに基づき、国際英語学科と英米文化学科の二学科を擁する新たな学部が開設され、両学科で合計 160 名の学生定員を持つ新学部が発足したが、それに伴って英文学科が平成 16 (2004) 年度末を以て、また大学院文学研究科英文学専攻修士課程がその 2 年後となる平成 18 (2006) 年度末を以て、それぞれその役割を終えることも確定した。平成 12 年度には新たに名称を「中京大学英文学・国際英語学会」と改め、本学会は英文学科学生、大学院英文学専攻大学院生に加えて、国際英語学部両学科の所属教員及び学部生を擁する学会として新たに出発したが、『中京英文学』の名称と伝統はそのまま継承され、吉川寛会長を戴く新しい学会名の下、同年度末に第 23 号を刊行した。文学部英文学科と国際英語学部の二組織に所属する学生を擁する体制下において、平成 15 (2003) 年 10 月には日本ウィリアム・フォークナー協会第 6 回大会を、また同 12 月には日本「アジア英語」学会 14 回全国大会を、さらに平成 18 (2006) 年 5 月には日本英文学会第 78 回全国大会を、それぞれ本学に招聘し、会員の総力を挙げてその運営を助成した。これらはこの短い移行期間において、新たに本学会が学術的な活動を活発化する試みがなされた一例と言えよう。

平成 17 (2005) 年度刊行の『中京英文学』第 26 号は、国際英語学部英米文化学科所属の教員・学部学生、及び平成 19 (2007) 年度より発足した大学院国際英語学研究科英米文化学専攻所属の大学院生を中心とした新学会である「中京大学英米文化・文学会」より刊行された。本号より、これまでの教員会員及び院生会員に加えて、学生会員の論文も掲載されるようになり、学部生を含む全会員に対

して開かれた機関誌となった。新生なった本学会の初代（通算で第七代）会長は細川眞氏である。これ以降機関誌最新号／最終号（第44号）まで、中京大学英米文化・文学会が学会活動運営の主体であったが、その後も国際英語学部のカリキュラム改革などにより、本学会は様々な変化を被った。その中で、平成20（2008）年度発行の『中京英文学』第29号からは足立公也氏が第八代会長を、また第32号刊行年度である平成23（2011）年度からは岩田託子氏が第九代会長をそれぞれ務められ、国際英語学部英米文化学科を母体とする本学会の運営が続けられた。

平成26（2014）年度は、国際英語学部にさらなる改組が生じた年であった。同年度より、従来の国際英語学科、英米文化学科の二学科体制は、国際英語学科一学科に統合され、英米文化学科が廃止された。しかし同時に国際英語学科の内部に国際英語キャリア専攻、英語圏文化専攻、国際学専攻の三専攻が擁立されることとなり、国際英語学部は新たに一学科三専攻体制で運営されることとなった。中京大学英米文化・文学会は英語圏文化専攻内に置かれ、同専攻の教員、学生及び大学院国際英語学研究科英米文化学専攻の大学院生を構成員として活動を継続することとなった。同年度より森有礼氏が第十代の、また平成29（2017）年度よりクリストファー・J・アームストロング氏が第十一代の会長として運営を主幹し、現在に到っている。なお国際英語学部は学部改組により、令和元（2019）年度末を以て学生募集停止となり、また同学部所属の教員は令和2（2020）年度より、新たに開設された国際学部と教養教育研究院に分属することとなったため、国際英語学部も令和4（2022）年度末を以て21年に亘る歴史を終えることが確定した。このため中京大学英米文化・文学会は、所属する学生・院生会員が全員卒業・修了する令和5（2023）年度末を以て解散することとなった。併せて同

年度末に刊行される『中京英文学』第44号が、本学会機関誌最終号となる。

以上中京大学英米文化・文学会の沿革を辿ってきたが、同学会は前身の中京大学英文学研究会の時代より、数次に亘る組織改編と名称変更を経て、実に足掛け46年に亘って活動を続けてきた。今年度末での活動停止は、国際学部の発足によってすでに確定済みではあったものの、本学着任後二十有余年に亘って運営に携わってきた学会幹事の一人として、この度の解散は残念至極である。特に数次に亘る学会の組織改編を重ねてなお本学会に所属して頂いた一般会員の方々、及び国際英語学部在籍する最後の学生諸姉諸兄については、令和2(2020)年当初に発生した新型コロナウイルスの世界的大流行のため、同年からほぼ2年余り、学会活動をほぼ完全に封じられる結果となったため、大きな不便をおかけすることとなった。学会の運営に携わった幹事として大変遺憾に思う。だがそうした中でも、令和3(2021)年度以降、新たなオンライン会議システムを駆使しつつ、学生向けの講演会を開催してこられたことはわずかな救いではあった。本学会は今年度末を以て解散するが、中京大学文学部、国際英語学部及びそれぞれの大学院に集ったすべての会員の皆様の長年に亘るお力添えに対し、ここに衷心より御礼申し上げる。併せて、この厳しく寂しい学会の終焉に到る数年間、母体となる学部組織の消失と新型コロナ禍という二重の困難の中で、本学会の運営を辛抱強く支え続けてくれたクリストファー・J・アームストロング会長と杉浦清文事務局長兼編集委員に、深く感謝申し上げます。

令和6(2024)年2月

中京大学英米文化・文学会幹事 森 有礼